

いちかわ自然観察

ガイドマップ 5

南部Ⅰ（稲荷木～原木～東浜）



～地域のあらまし～

JR総武線や国道14号が走る市川砂州と江戸川放水路に挟まれたこの地域では、明治時代まで製塩業が営まれていましたが、昭和30年代以降に行われた東京湾沿岸の埋め立てに伴い京葉臨海工業地帯の一翼を担ってきました。江戸川放水路や一部の臨海部では海の自然の姿をかいま見ることのできる地域です。

市川市

市川自然観察ガイドマップについて

市川市では、市民の皆さんに身近な自然環境に目を向けていただき、そこに生息する動植物の姿や自然のしくみについて知っていただくため、市川市を6つの地域に分け、地域ごとに順次自然観察ガイドマップを発行しています。市川市の自然環境は決して豊かとは言えませんが海、低地の市街地、川、谷津、斜面林、台地上の農地など、バラエティーに富んでいるのが特徴です。

自然観察ガイドマップは、地域の自然の見どころを紹介したマップとあわせて、市川市の自然を観察する上でのテーマを、各マップに10テーマずつ合計60テーマ紹介しています。どうぞ休日のお散歩のお供にさせていただき、身近な自然をお楽しみ下さい。

市川市では市川市の自然を紹介する下記の資料を発行しています。

- 市川の緑と水辺のガイドブック
- 市川市巨樹・巨木林調査報告書

また、歴史や文学に関する出版物も発行しておりますので、詳細についてはお問い合わせ下さい。



12100

時代とともに変わる川の流れ

約6千年前は市川市の大部分が海の底でした。その後海が後退して、陸地に出来た水の流れは“板東太郎”の異名を持つ暴れ川、利根川の支流になりました。上流の大雨のたびに氾濫し、肥沃な大地をもたらしました。

江戸時代、水害から江戸のまちを守るため二度の大工事が行われ、利根川の流路を太平洋側の銚子へ向けて変えました。利根川東遷と呼ばれています。

明治43年（1910）の大洪水が契機となり江戸川の改修工事が進められ、その一環として、行徳地区から東京湾へ至る放水路を開削しました。これが大正8年（1919）に完成した、全長約3kmの江戸川放水路です。

昭和22年（1947）のカスリーン台風による大水害を契機に、放水路の固定堰を撤去し今の可動堰に改められましたが、この完成は昭和32年（1957）です。

ところで、江戸川はどこからどこまで？ 始点は関宿ですが、終点は二つ。一つはかつての本流で江戸川区と浦安市の間に至る約60km。もう一つは放水路で三番瀬へ抜ける約55km。今ではこちらを江戸川と呼んでいます。



江戸川放水路のユリカモメ

三番瀬の海浜植物

今はもう、すっかり自然の砂浜のような風景となっている三番瀬の東浜1丁目地先の人工干潟ですが、この地域の埋め立てが始まったのは、1974年ごろからでした。当時、船橋分岐航路であったところが市川航路の完成後に埋め戻され、海浜公園の形がほぼ出来上がったのが1985年ごろです。

航路を作るための浚渫土が使われたのですから、陸上植物の埋土種子がたくさんあったとは思われません。砂浜に生え始めた植物のタネは、どこから運ばれてきたのでしょうか？ 海辺の自然環境はきびしいものです。塩分を含んだ激しい風と乾燥、直接に波しぶきをかぶることもあるかもしれない。それらから自分を守る対抗手段は、低い位置、横に這う、風になびくなどの方法です。スゲやハマダイコンなどは根も深そうです。

樹木では、葉の表面にクチクラ層を発達させた厚い葉を持つものもあります。アカザ科のオカヒジキは、細く膨らんだ葉に水分を蓄えています。

人工の干潟でも、時の流れが自然を蘇らせてくれるようです。三番瀬に面したほんの小さな砂浜を、大切に見守りたいと思います。



三番瀬に面した東浜1丁目地先の海浜植物群落

行徳可動堰と3つの水門

ふだんの可動堰は三つの丸いゲートを下げて、水の流れを止めています。円形のローリングゲートの直径は3.5m、鉄板の厚さは9mmでしたが、40年以上経過して腐食が進み、改築も検討されています。江戸川の水は、東京都の金町浄水場と千葉県 の栗山浄水場の水源でもあること、満潮の時でも海水が入り込まないこと、水位を上げて取水しやすくする必要があるなど、可動堰の役割は重要です。

上流に大雨が降ったときには、丸いゲートを回転させながら上げて下流に水を流す。淡水の川の水が海の中へといちどきに大量に流れ込んでいくわけです。川で暮らしていた魚も流されていきます。時には上流の蛇や昆虫類も激流にもまれながら海へ！

水質はどう違うのでしょうか。江戸川の上流はもちろん淡水、可動堰から下流は海の一部のようなものです。旧江戸川とわかれる東京側の水閘門のころは、時々で水質が微妙に変わります。行徳橋を歩いて渡ったり、パナマ運河式の水閘門がいつ開くのか、見ているのも楽しい。

大町の自然博物館には、下流に流される魚の展示解説がありますので、ぜひご覧になってください。



右岸の下流側から見た行徳可動堰

まちの中の小さな自然を探そう

通り過ぎてしまう畑や市街地の向こうに森があったら、覗いて見るのもまち探検の楽しみです。たいていはそこに、祠や庚申さまなどの石碑があります。こうした場所が開発から取り残されたのは、祟りを恐れたからでしょうか。

稲荷木から行徳橋を渡る手前の、道路沿いの小さな森もその一つです。針葉樹のどがった形ではなく、タブノキやクスノキ、すこし小さなサンゴジュ、アカメガシワなどが茂っています。

中へ足を入れると、南に面したところはアズマネザサがぎっしり、その北側はキツガが地面を覆っている。イノコツチやチヂミザサも少し見られます。トウネズミモチ、ムクノキ、シロタゴメの芽生えもあります。

木の実や芽生えを見つけたら、すぐ近くに親の木があるのか、探してみましょう。意外に遠くから鳥が運んだものかもしれません。鳥は果実を飲み込んで消化できないタネを糞として出します。

さて、鳥は飛びながら糞をするのか、つかまりやすいころあいの横枝にとまってから、糞をするのでしょうか？



稲荷木の道路沿いにある小さな森

海へと続く市街地の川の流れ

市川の地図を広げて、原木や高谷あたりの水色で示された川の流れを追って見てください。直線で描かれていて、途切れている。ほとんど標高差のない地域で、水はどこへ流れていくのでしょうか。

実際に歩いてみると、突然暗渠になって流れが消えていたりします。田んぼがこのあたりにあった時代の、農業用水として使われていた名残なのでしょう。江戸川放水路をまたぐ水色の水管橋とともに、暮らしとかがわっている水の流れを考える材料です。

もう一つの散歩の楽しみは、草刈りされることも少ない地域の雑草群落、工場などをとりまく樹木の茂みです。クズ、ヤブガラシ、カラスウリ、ヘクソカズラなどのつる植物が、それなりのなわばりを主張しながら、林のマント群落のような風景を作っています。

高架になっている鉄道の下は、かなり乾燥するし、日当たりも悪い。草の種類と高さが違います。晩秋の行徳橋の下は、オギの穂から飛んだタネが湿った土に一面についています。花が咲き、鳥が飛んでいる時だけではない、自然の季節の移り変わりを楽しみましょう。



稲荷木から江戸川に平行に流れる高谷川

埋立地の動植物の暮らし

高度経済成長時代に行われた遠浅の海の埋立工事は、鉄の矢板を打ち込んで海を仕切ることから始まります。そこへ沖の海底から泥水状態の砂泥をポンプで吸い上げて、堆積する方法をとりました。

埋め立て直後は当然ながら塩分が多い塩湿地なので、アルカリを好むアカザ類などの少数派が茂り始めます。ウラギクもそうした環境が好きな塩生植物です。塩分の減少と乾燥化が進むと、すこしずつオギやセイタカアワダチソウなどの多年草も入り込んできます。

砂まじりのところは、コアジサシにとって絶好の巣づくりの場所でもありましたが、草が茂りだすとともに、別の場所へと去ってしまいました。

埋立地の環境も、埋立当初の単純な環境から、昆虫や野鳥などのかかわりの中で次第に多様性に富んだ複雑な状態へと移り変わっていくのですが、帰化植物が多く見られるのも特徴でしょう。

埋め立てて何十年かが経過した市街地の生き物調査をして見ましょう。一見同じように見える植物群落も、昔からのものとはかなり違うことが実感されるはずです。



従来の植生が破壊された所には移入種が茂る

車の通る道と人の通る道

お江戸日本橋から各方面へ放射状に伸びる昔の街道の流れが、今もそのまま引き継がれているのでしょうか。

市の中央部から南へ自転車や歩いて行こうとすると、いろいろな障害にぶつかります。京葉道路や鉄道が左右に延びていて、その下をくぐるか、上をまたぐかが結構面倒で、遠回りを余儀なくされます。とてもベビーカーや車椅子では渡れません。

歩く立場からすると、アスファルトよりはチップを敷いたような柔らかい道がいいけれど、メンテナンスが大変そうです。

人ごみだとוגざりするけれど、誰も通らないと寂しくて怖くなる。散歩道への期待は、景色を眺め、時には休んだりする人と、一定のスピードでウォーキングする人など、人それぞれの多様な注文が出てきます。

誰もが生涯のいつかの時期にハンディキャップを持つことがある。多様な人が障害なく歩ける、ユニバーサルデザインを意識したまちづくりの視点が求められる時代になっています。



水路も京葉道路は下をくぐり抜けて渡る(旧内匠堀)

ススキ、オギ、ヨシの違いは・・・？

日本の秋の風物、お月見にススキは欠かせません。背の高いイネ科の植物は種類も多いのですが、すべてススキと勘違している人も多いようです。

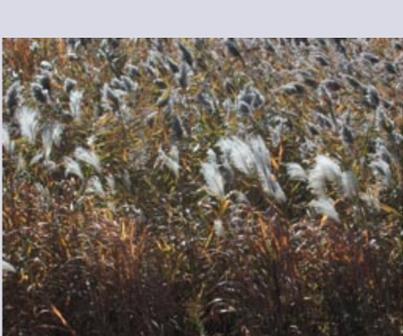
本来はススキが生えるような環境が、ほとんどセイタカアワダチソウに覆われていた時代もありました。移入種が繁茂し、ススキが茂るような昔からの環境が減ったようにも思えます。

ススキが好きなのは、日当たりが良い野原で、水辺は嫌いです。葉は根際からたくさん出て、ふちはざらざらで触ると手を切ることもあり、中央の葉脈が白く目立ちます。

泥が堆積した川原などを好むのがオギ、地下茎から一本ずつ茎を立て、穂が出る頃は下葉が枯れ上がるので、細い竹のような節のある茎がはっきりしてきます。

ヨシはもう少し水のあるところが好き。葉の幅も広く、穂も大形です。どんな植物があるかでどんな環境かが類推できます。

最近では外国産のセイバンモロコシが荒地にふえ、紫がかった茶色の穂をまばらに出します。時には図鑑を抱えて川原の散歩を楽しみましよう。



江戸川放水路のオギ（手前）とヨシの大群落

クリーンセンターと衛生処理場

いつもは三番瀬の海辺へ直行してしまう二俣新町から南下する道の途中に衛生処理場があり、田尻にクリーンセンターがあるのをご存知でしょうか。

衛生処理場は、平成12年春に最新の膜分離装置の採用などで一新され、一日に250キロリットルの処理能力を持ちし尿処理場に生れ変わりました。水洗トイレ以外のし尿は、すべてここで処理されています。2階には見学者コーナーもあります。

クリーンセンターは平成6年（1994）に改築され、家庭などから出る一般廃棄物を一日に600トン処理する能力を持つ施設で、焼却熱を利用した発電も行なっています。処理の過程を見学できるコースもあります。

自然界では有機物を作り出す植物、それを食べる動物、それらの老廃物を分解して土に戻す微生物たちと、3つの働きが組み合わせあって、物質が循環する生態系を作っています。市街地の人々の暮らしにも当然それらが必要なのに、見過ごされてしまっているのです。

日常生活、身の回りから出ていくゴミなどがどう処理されていくのか、施設見学などを通して埋め立てだけに頼らない、自然界のような循環型社会を考えてみましょう。



リサイクルプラザの“じゅんかん堆肥”の解説

雨の日も楽しく散歩を！

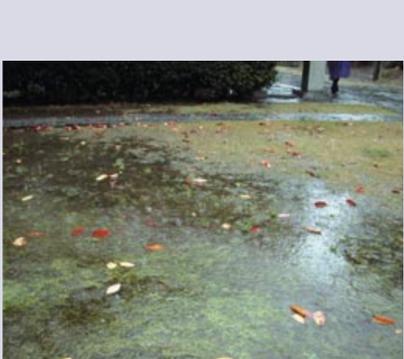
少し前は雨天中止の観察会が多かったのですが、最近是小雨ぐらいなら実施とか、雨天大歓迎！という会も出てきました。

雨が降ると水の流れがよく分かる。ごく僅かな地面の傾斜や土の状態がわかります。

突然の夕立に雨宿りした大木も、やがて茂みの隙間から枝や幹を伝わって、大粒の水滴が落ちてくる。足元の土は、泥か砂地か。小さな土の粒子は雨に流され、粗い砂粒だけが残るところもある。踏み固めたところや、芝生は意外に水がしみこまないで、水溜りができたりする。お天気の日には全然気がつかなかったことの新発見があります。

花びらを閉じてしまう花も多い。鳥や蝶は、どここの茂みにひそんで晴れ上がるのを待っているのでしょうか。

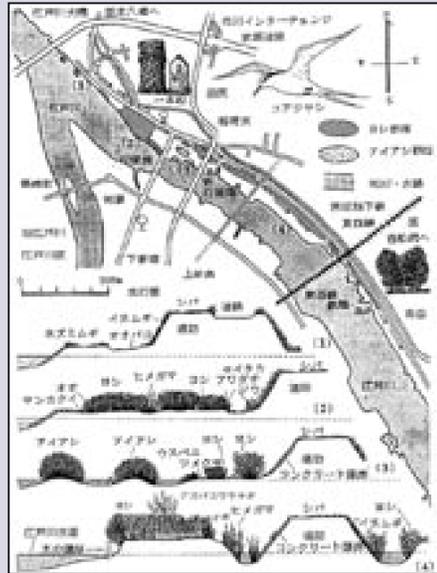
舗装された市街地では、水は排水溝から川へ、さらに濁流となって海へと一気に流れていきます。ふわふわの林の土と違って、市街地は水がしみこまない、地下水を涵養しない地面の比率が極端に広がっています。雨の日ならではの散歩を楽しく。ただし、万全の安全対策をお忘れなく！



雨の日の水たまり、晩秋の原木山妙行寺の庭

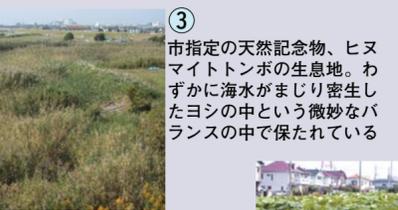
いちかわ 自然観察 ガイドマップ 5

南部 I 稲荷木～原木～東浜



★左の図は市川学園教諭の故石井信義氏が1970年頃にかかれたもの。環境の変化に伴う現況との比較を現地でご確認ください。

行徳可動堰で仕切られた江戸川放水路は、ここから下流が行きどまりの海となる。冬の間、ユリカモメがここに集まる。



⑧ 妙典側の干潟で実施された小学校の干潟観察会。初めは遠慮していた子供たちも、カニや貝を見つけて夢中になる。



① 水路改修後に作られた稲荷木緑道。



④ ケヤキの巨木がある高谷の大鷲神社



⑤ 原木の妙行寺



⑩ 企業が実施している“ふるさとの森づくり”。流通センターの周囲に65種類、5000本の苗木が植えられた。どんな林に育つか楽しみ。



⑨ アシ原で咲く塩生植物のウラボシ。



⑪ 夏にはムクゲが咲く高谷新町の歩道。



⑫ 高谷新町の先端から眺める東浜の三番瀬方面。はるか向こうに千葉市の幕張が見える。

電車から見おろす そして、歩いて確かめる

西船橋から市川塩浜へ向かう武蔵野線、二俣新町を通る京葉線は高架になっているので、市街地の緑が一望できる。



二俣小付近の緑はトウネズミモチ。林縁にはムラサキカタバミなどの帰化植物が多い。



京葉線の車窓から見るクリーンセンター付近。外環道路の工事も進んでいる。



遠くから見ると大きな茂みだが、ここもトウネズミモチ。自然の林とは違って階層構造は発達していない。



原木公園近くのハマヒルガオ。



真間川水門近くには大きな船も見られる。



⑭ 二俣新町付近の道端の茂み。トウネズミモチなどに、クズやヤブガラシなどが茂りマント群落を作っている。



⑮ 平成12年に改修された衛生処理場。最新の処理方法などを見学するコースもある。

東浜・三番瀬の風景

二俣新町から続く2kmのまっすぐな道を南下すると、人工干潟の市川の三番瀬が広がる。



⑯ 東京湾の最奥部に位置する三番瀬の干潟・浅海域は人々の熱い視線をあびながら約4km四方ほどに広がっている。鳥の気配が感じられない時も、おびただしい生き物たちが暮らしているのを感じとって欲しい。



⑰ 砂浜に打ちあげられたアカエイ。尾の付け根近くには、毒を持つトゲがある。



⑲ ホソバハマアカザの紅葉。



⑳ 寄生植物のアメリカネナシカズラ。



㉑ 夏の終わりに咲くハチジョウナ

中流から下流の真間川



千葉街道の境橋付近。ここから北の方へサククラ並木が続く。

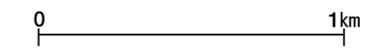


三戸前橋付近を南から北へ。左側の緑は妙行寺の境内。



東京湾への真間川の出口。陸と海は直立護岸と水門で区切られている。

★道路は主なものを示してある。縮尺は1:17000、およその目安は6cmが1km。



★マップデザイン：八木 隼